

HLA 遺伝子 (phenotype ; 蛋白レベル) を 指標とした癌治療班

研究班代表

福島県立医科大学医学部 低侵襲・先端治療科 竹之下 誠一

東海大学医学部消化器外科 生越 喬二

平成23年度の班研究会議は下記の日時に行われた。(班会議および秋季講演会でHLA研究につき述べた内容)

班 会 議：平成22年6月18日 (土)
東京大学医学部教育研究棟13F
第7セミナー室
秋季講演会：平成23年11月26日 (土)
東京八重洲カンファレンスセンター
5階

昨年議論した Term の定義 (日本語、英語)
を下記のように規定いたしました。

- ・ 適切治療法 (effective personalized therapy)
を施行すれば、10年以上生存する可能性がある個人に合った治療法。
- ・ 不適切治療法 (Ineffective personalized therapy)
とは、5年以上の生存が期待できない治療法。

既存の胃癌治療法 (Gastrectomy alone, Gastrectomy + PSK (P)、Gastrectomy + Furuoropyrimizine (F) 剤、Gastrectomy + MMC (M)、Gastrectomy + M + F、Gastrectomy + M + F + P) を施行された1,753例中1,068例 (60.9%) の症例で適切治療法の特定が可能であった。一方で、178例 (10.2%) の症例では不適切治療法の特定がなされ、注意喚起が必要である。分類不能は、507例 (28.9%) であ

った (図1)。現実には、特定された適切治療法を受けた患者群では、予後良好であった半面、特定された不適切治療法を受けた患者群では、予後不良であった。

1. 再現性の検討

解析方法① 1975年12月～2005年8月までの東海大学症例 (1,391例) の約80%症例の2007年9月時点の予後から全症例の適切治療法等を特定し、2010年9月時点の予後を検討した (図2)。

解析方法② 同様に東海大学症例 (1,391例) の約80%の2007年9月時点の予後から、全国症例 (362例) の適切治療法等を特定し、2010年9月時点の予後を検討した (図3)。

解析方法③ 同様に東海大学症例 (1,391例) の約80%の2007年9月時点の予後から、2005年9月から2010年2月までに新規登録された症例 (209例) の適切治療法等を特定し、2010年9月時点の予後を検討した (図4)。

2. 経口薬剤 (Furuoropyrimizine (F) 剤、PSK) の適切な投与期間

適切治療法を施行した患者群では、経口薬剤の投与期間で、差を認めなかった。しかし、不適合治療群 (不運にも適切治療を受けなかった患者群)、分類不能群、さらに、不適切治療を受けても、

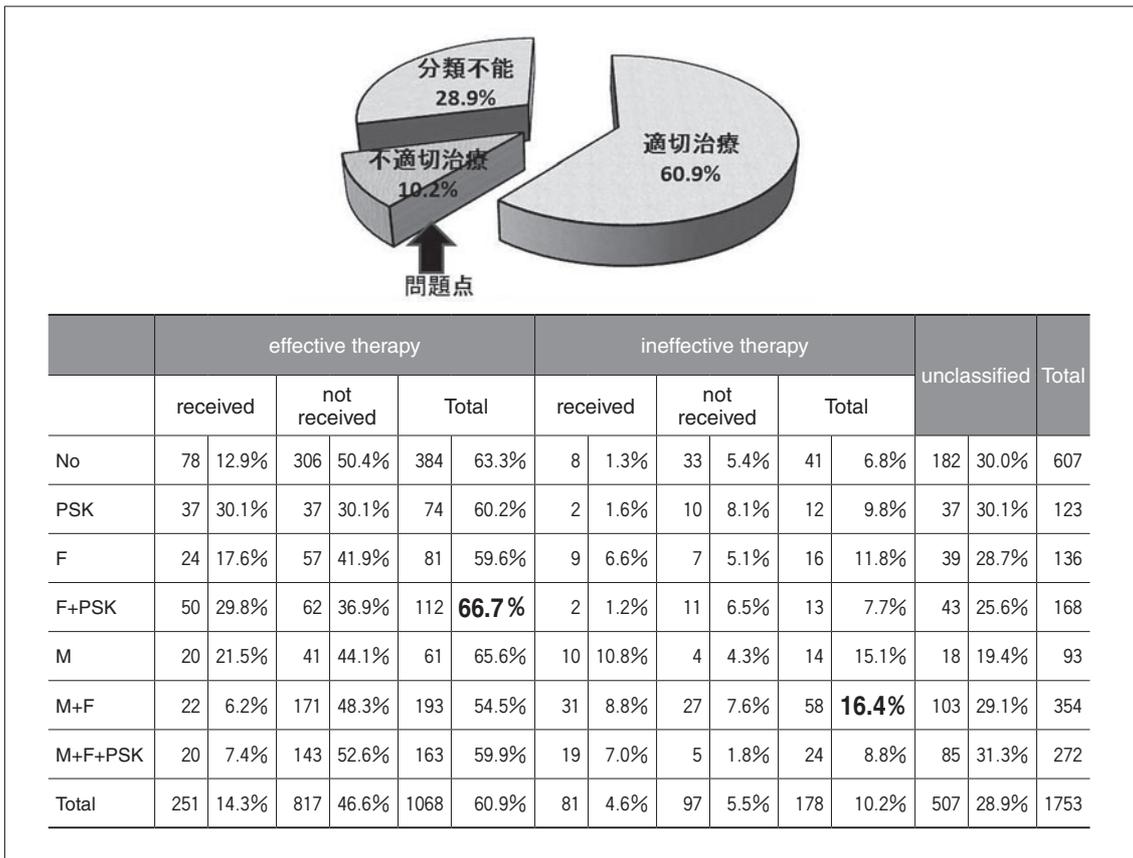


図1 既存の胃癌治療法と適切治療法、不適切治療法が特定された頻度

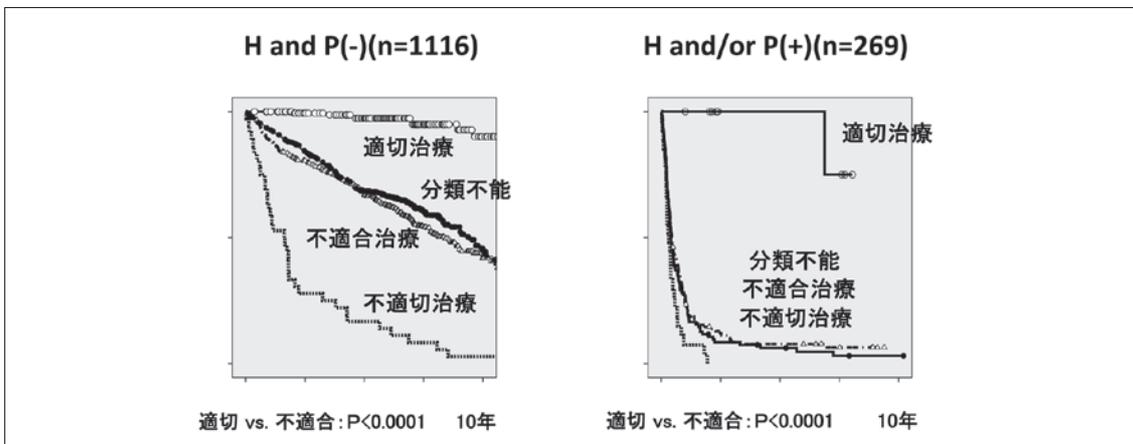


図2 東海大学症例 (n=1391) の2010年9月時点での生存曲線

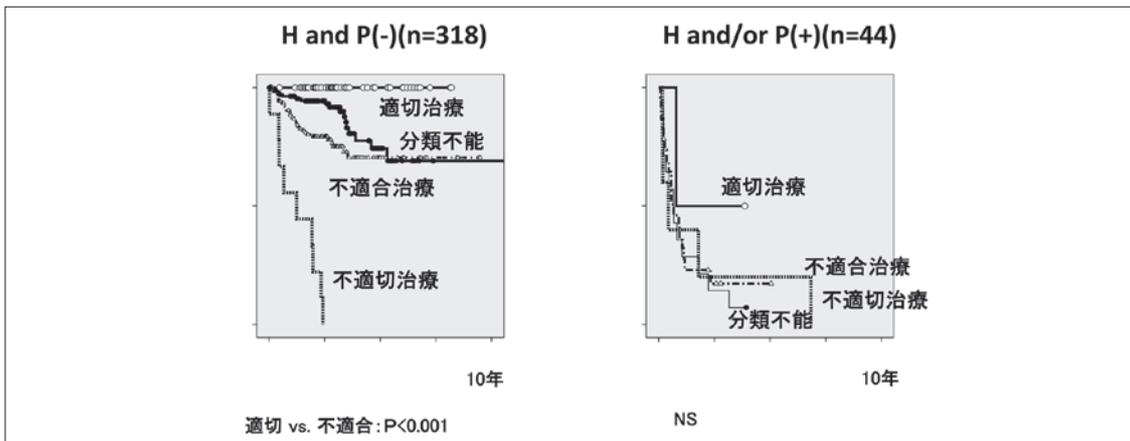


図 3 全国症例 (n=362) の2010年9月時点での生存曲線

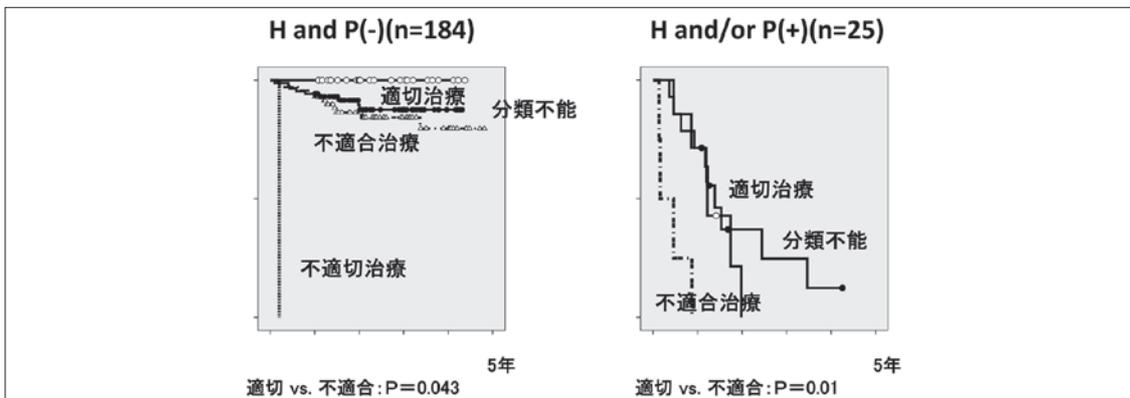


図 4 新規登録症例 (n=209) の2010年9月時点での生存曲線

F 剤、PSK 投与を 2 年以上投与した患者群の予後が良好であった。不適切群は予後不良であるので、投与できなかった患者群とも理解できるが、今後の検討課題でもある。

今後の方針

胃癌で作成した HLA antigen score、Pair-match score が、他の癌の適切治療法特定に応用できるかどうか検討する必要性を感じている。

今までの HLA 班の集大成の
まとめを下記に掲載しました。
ぜひご覧ください。

Effective and ineffective personalized therapy
based on serum HLA from a 30-year odyssey
([http://www.jstage.jst.go.jp/article/acrt/19/2/19_44/
_article/-char/ja/](http://www.jstage.jst.go.jp/article/acrt/19/2/19_44/_article/-char/ja/))